

## 母子歯科保健管理に関する研究

井上 直彦<sup>\*</sup> 伊藤 学而<sup>\*\*</sup>  
井上 昌一<sup>\*\*\*</sup> 亀谷 哲也<sup>\*\*\*\*</sup>  
桑原未代子<sup>\*\*\*\*\*</sup> 幸地 省子<sup>\*\*\*\*\*</sup>

要約：乳幼児歯科保健の真の目的は咀嚼器官の健全な発育を可能とすることであり、このためには母子を一体とする健康教育と食生活指導とを基幹として、これに健診、予防処置、早期治療を結びつける必要がある。本研究は、このことを具現化するためのモデル地区での総合的歯科保健計画の試行<sup>1)</sup>を主軸とする、全班員参加の総合的な研究と、健康教育や食生活指導の内容に根拠を与えるための、いくつかのサテライト的な研究とからなる。これらのうち本年度は、次項以下に示すような5つの主題について報告する。

見出し語：発達期、歯科保健、保健システム、食生活指導

研究方法：健康教育と食生活指導を基幹とするモデル地区での試行に関しては、今回は歯肉炎スコアによる食生活指導効果の判定結果について報告する。健診に先立って食生活を変える運動の強化週間をおき、歯の汚れに最も敏感に反応する歯肉炎<sup>2)</sup>を用いて食生活指導の効果を評価しようとするものである。第2の論文は若年者の顎関節症の実態に関するもので、中学生および高等学校生徒男女合計612名における顎関節症経験者の頻度と、経験者における生育歴とを調べ、さらに、顎関節症患者の咬合の分析を行うものである。第3、および第4の報告は、授乳の形式と咬合の発育との関係を明らかにしよ

うとするものである。すなわち、前者は、3歳から3歳6月までの幼児患者334名を対象として、母乳哺育群と人工乳哺育群とにおける第2乳臼歯の咬合関係、発育空隙の数などの差について調べようとしたものである。一方、後者は、授乳期における口腔の機能量が顎発育に重大な影響を与えていることを証明するために、搾乳によって蓄えた母乳を用いて、マウスの人工哺乳モデルを作るというきわめて難しい実験に挑戦したものである。第5の課題も実験的研究であつて、“歯の発育のためにカルシウムが必要である”という従来の指導が誤りであることを実証することを目的とするものである。カルシウム

<sup>\*</sup> 東京大学分院歯科口腔外科   <sup>\*\*</sup> 鹿児島大学歯科矯正学講座   <sup>\*\*\*</sup> 鹿児島大学予防歯科学講座  
(The University of Tokyo)   (Kagoshima University)   (Kagoshima University)

<sup>\*\*\*\*</sup> 岩手医科大学歯科矯正学講座   <sup>\*\*\*\*\*</sup> 藤田学園保健衛生大学歯科口腔外科   <sup>\*\*\*\*\*</sup> 東北大学口腔外科  
(Iwate Medical College)   (Hujita-Gakuen Health University)   (Tohoku University)

欠乏飼料によってマウスを飼育し、その発育、生存、繁殖、骨組織と歯とに対する影響を検討している。

以上のように、本年度の報告には、地域集団に加えられた外力に対する反応の測定に関するもの1編、哺乳形式などの育成条件が顎発育にどのように影響するかに関して、顎関節症や咬合状態を指標として調べた実態調査・疫学的研究2編、咀嚼器官の発育に対する人工哺乳やカルシウム摂取量の影響を見ようとする実験的研究2編が含まれている。

結果：個々の論文において得られた知見については次項以下に詳しく述べられているが、ここでは結論的な部分についてのみ転記する。食生活指導の効果に関しては、モデル地区と対照地区とを比較した結果、食生活指導が基本的には有効であったこと、しかし、個々の対象についてみると、指導効果が認められるものと、そうでないものとに分極化している傾向があることなどが指摘されている。若年者顎関節症に関しては、その実態が細部にわたって明らかにされ、同時に人工乳哺育、歯ぎしり、咬合異常、上顎第2大臼歯の歯軸など、多くの関連要因が抽出されている。第3の報告では、哺乳および離乳の実態と、乳歯咬合の状況とが報告され、哺乳形式と第2乳臼歯の咬合状態、および離乳開始時期と上顎前歯の前突との間に有意の相関があることが示されている。第4の論文では、下顎骨長、下顎枝高、咬筋重量、などで高い有意差がみられ、舌重量、下顎頭前後径、および下顎角でも5%以下の危険率で有意差があると報告

されている。低カルシウム飼料を用いた実験では、体重の増加率や繁殖能力が実験群で低く、骨の重量は少なくなるが、歯のカルシウムや無機リンの含有量には差がないことが知られた。

考察：本研究の本年度の研究の進行はきわめて順調であり、いくつかの具体的な成果が得られたと考えられ、また、現在着実に進行中の研究主題も多い。しかし一方では、必ずしも十分な考察が尽くされているとはいえない面もあり、今後に向かって一層の努力が必要と思われる。例えば、食生活指導の効果が歯肉炎によって表現されることをより高い精度で実証するためには、対照集団に関するより多くのデータや、より詳細な面接調査の裏付けが必要である。また、顎関節症に関しても、単純相関分析のみに頼っては無数の要因が浮かび上がるのみであって、問題の本質には到達し難い面がある。偏相関分析による共通因子の除去や、重相関分析、正準相関分析、因子分析などによって問題の本質を捉えることが必要であろう。さらに、哺乳の咬合発育への影響に関しても、出来れば乳歯咬合ではなく、永久歯咬合を対象としての検討に進みたいものと考えられる。これらの点を考慮しつつ、今後の研究を積極的に展開したい。

文献：

- 1) 井上直彦ほか：乳幼児歯科保健に関する研究，昭和58年度母子保健学システムの充実に関する研究研究報告書，197-216，1983。
- 2) 幸地省子ほか：歯肉炎を指標とした食生活指導の効果の判定，口腔衛生会誌，印刷中。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳幼児歯科保健の真の目的は咀嚼器官の健全な発育を可能とすることであり、このためには母子を一体とする健康教育と食生活指導とを基幹として、これに健診、予防処置、早期治療を結びつける必要がある。本研究は、このことを具現化するためのモデル地区での総合的歯科保健計画の試行を主軸とする、全班員参加の総合的な研究と、健康教育や食生活指導の内容に根拠を与えるための、いくつかのサテライト的な研究とからなる。これらのうち本年度は、次項以下に示すような5つの主題について報告する。